

AJU

コンビニハウス

会報

編集/コンビニの会事務局
連絡先/〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人
コンビニの会

定価/150 円
昭和 54 年 8 月 1 日第三種郵便物承認

第176号



納涼夏まつり

地域一丸で夏まつり開催

風景写真愛好家 片桐 彰夫

夏まつりが無事終わってホッとした。スタッフとして参画したが、熱中症やケガで救急車のお世話にならないよう、食事摂取、水分補給、交代休憩など最大限の注意を払った。

近隣での夏まつりの状況は、スタッフ高齢化で開催しない地域もあれば、暑さを避け秋まつりへ移行、盆踊りやぐらのレンタル化、民間事業者とのコラボ開催など、いろいろと工夫された地域もある。当地域の夏まつりは、関係者が一丸となって自力で運営・開催してきている。

夏まつりを運営するのに、いろんな役割がある。資金調達は、自治会役員が地域内外の事業所やお店に協賛をお願いに回る。地域内では快く協賛をいただける。地域外で競合すると早い者勝ちの場合もある。盆踊りのシンボルであるやぐら設置は、消防団員が暑さを避けて朝 6 時から始める。

(次ページへ)

もちろん重機を使わず人力のみで。本部席、模擬店、ゲームコーナー用のテント設置は、自治会組長、体育委員、子ども会が中心で行う。慣れてきたのであろうか、今年は30分ほどで10基以上のテント設置が完了した。

今年の夏まつりは、子ども会演技、太鼓演奏、有志団体演技そして盆踊りと続き、いつもより参加者も多く大盛況であった。

夏まつりは、何のたに行うのだろうか。この地域にはこんなに楽しいイベントがある、先ずは参加してみてはとPRできる。さらには一緒に楽しい街づくりをしませんか、とお誘いすることができる。誰かと一緒に何かに取り組むことによって、人間関係がどんどん広がり、充実した日々が過ごせるのではないかと思う。



盆踊りやぐら組立

雑記 ごまめの歯ざしり

サンマ考

ジュウジュウと音を立て、香ばしいにおいがする。大根おろしを添えて、しょう油を一寸垂らす……。秋の味覚と言え、サンマを挙げる人が多いだろう。肴に日本酒をチビリチビリやる。秋を体感する瞬間だ。

落語の演目に「目黒のさんま」という噺がある。江戸の太平の世に、さる殿様が家来と馬で遠乗りをした先の目黒のこと。普段は、毒味役の手を経た冷め切った尾頭付きの鯛しか食べたことのない殿様が空腹で、焼きたてのサンマを食べ、その美味しさに仰天。屋敷に帰ってからサンマの味が忘れられず、憧れ過ぎて騒動が起きる。噺では、サンマは庶民が食べる下魚とされている。

しかし、庶民の味方だったサンマも、だんだんと縁遠くなってきた。漁獲量は近年、地球温暖化や乱獲などの影響で低調だという。国の統計などでは、2008年の約35万トンをピークに、2022年は過去最低の約1万8000トへと激減した。値段は、私の幼少時（半世紀前）には1匹100円もしなかったと記憶しているが、最近は店頭で200円前後の値札を見て、ため息をつきながら缶ビールを一本買うのを我慢して買い物がこへ入れている。

8月中旬からサンマ漁も始まり、新聞紙面で「豊漁」「大ぶり」の見出しが躍った。ホッと胸をなで下ろす反面、「来年は大丈夫か」との不安が頭をよぎる。主な漁場が日本近海から北太平洋へと移りつつあり、他国の大型漁船の進出も著しく、それに対応するため、水産庁が日本漁船の大型化に乗り出すとのニュースも聞かれ、海洋資源保護に逆行するかのような話だ。「サンマは目黒に限る」とは言わないが、何事も「過ぎる」のは良くないと自戒しつつ、秋の夜長に杯を重ねる。

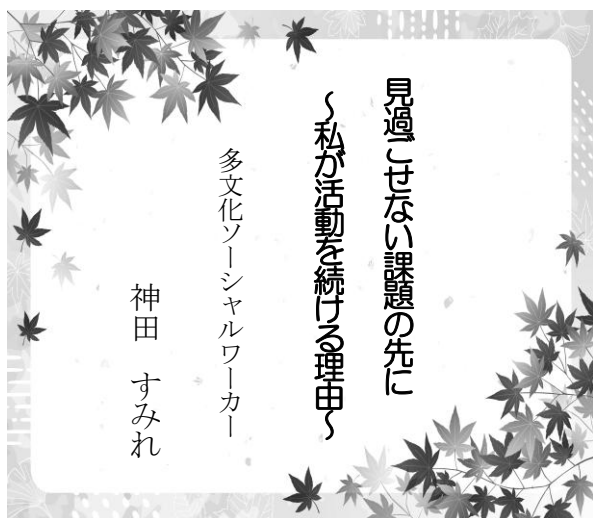
（会報協力者 濱 忠）

エゼル福祉会 2025年度 全職員研修報告

7月19日に行われたエゼル福祉会の全職員研修で、神田すみれ先生を講師に迎え「海外出身の人々とはたらくということ」というテーマの研修が行われました。研修では日本で働く海外出身の方が増えてきていることについて、日本の政府の施策として拡充してきた経緯や現状があること、具体的な外

国籍の方が日本ではたらくための制度について等を学びました。受け入れ側の日本人、海外から就労にきている外国人のそれぞれが感じていることからみてくる必要があります。文化や慣習による常識や当たり前違います。文化や慣習による常識や当たり前前が違うということ、コミュニケーションの不足や知識がないことで、自分の側からの一方的な考えになってしまったり、気が付かないうちに先入観や偏見を持って見てしまったりしていることが、たくさんあります。ちように研修の時期は参議院選挙があり、政党によっては外国人の問題についても様々な発言をされており注目されていた時期でした。この研修を通して、多文化対応力が求められるということを講義やグループワークをしながら職員同士深め合う機会になりました。

エゼル福祉会の皆様、会報への寄稿の機会をいただき感謝いたします。
私は現在、多文化ソーシャルワーカーとして、日本で生活する外国にルーツを持つ方々のサポートをしています。日々、様々な相談を受ける中で、私自身の過去の経験が、今の活動に深く結びついていることを実感しま



す。本稿では、その原点となるいくつかの背景を紹介します。

私の人生が大きく舵を切ったのは、15歳の時でした。当時通っていた学校にうまく馴染めず、現状を変えたいという思いから単身アメリカへと渡りました。しかし、言葉も文化も違う環境での生活は厳しく、精神的に辛い時期もありました。そんな私を支えてくれたのは、現地の人たちの優しさです。ホストファミリーは、私が現地の高校を卒業するまで家族のように私を育て、支えてくれました。隣町に住む元高校教師の先生は無償で3年間、毎週勉強を教えてくださいました。学校生活も、日常生活も、周囲の助けなしでは、何もできない存在であることに苦しむ私に、その先生は「今は助けが必要かもしれないけれど、将来、同じ状況にある人に恩を返してい

けばいいのよ」という言葉をかけてくれました。その言葉は私の心に深く残り、その時の苦しい状況を乗り越える支えとなり、現在の活動の指針にもなっています。高校卒業後は現地の地元の州立大学に進みました。大学では多様なルーツを持つ友人たちと学び、寝食を共にする中で、互いの文化を尊重し合いながら共生するということを学びました。「どうしたらアメリカ人と同じようになれるのか」という同化を求められる社会の圧力や苦しみから解放され、アジア人としての自分のアイデンティティを誇りに、大切に思えるようになりました。

アメリカの大学を卒業後、台湾で2年間の日本語教育に携わった後、26歳で日本に帰国した私を待っていたのは、また別の形の困難でした。10代半ばで単身日本を離れたた

め、社会的な「基盤」がなく、アパートの契約や仕事探しに大変苦労しました。この経験は、日本でゼロから生活を始める人々が直面する課題を、自分事として理解する上で大きな意味を持ちました。その中で私を支えてくれたのが、地域の日本語教室で出会った海外出身の方々でした。日本語教室でボランティアを始めた私に、彼らは日本の生活に必要な情報をたくさん教えてくれたのです。

活動の直接のきっかけは、帰国から2年ほど経ち、派遣の仕事で瀬戸市国際センターに2年ほど勤務したことでした。行政の相談窓口だけでは対応することができない課題を抱える海外ルーツの住民を目の当たりにし、現状の不足や、継続的な支援の必要性を痛感しました。私自身がアメリカで、たくさんの地域の人たちに助けてもらった経験と想い

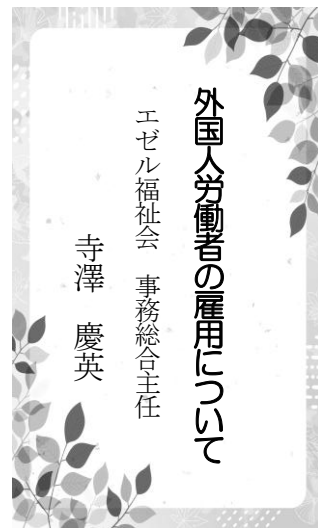
を重ねながら、現状の体制への課題意識から、大学院で学びたいと思うようになりました。

大学院の修士課程、名古屋NGOセンターでのNたま研修、その後、愛知県の多文化ソーシャルワーカー養成研修で学ぶ機会を経て、徐々に「多文化ソーシャルワーカー」

としての活動が始まりました。それから20年。活動継続の理由をよく聞かれますが、目の前に困っている人がいる時、自分だけが日常を継続することに居心地の悪さを感じるというシンプルな理由です。幾らかの時間と労力、そしてほんの少しの工夫で、その人の人生は大きく変わり、共に新しい価値を生み出す同じ地域に暮らす仲間になります。そのような経験を繰り返すたびに、それは確信に変わりました。

現在は、市民団体や地域、行政や企業とも

連携し、社会の仕組み自体に変化をもたらすアプローチを意識するようになりました。誰もが尊厳をもって生きられる社会の実現は、真に豊かな社会であるという想いを、この原稿を読んでくださった皆様と共有できれば幸いです。



以前に比べて、どこに行っても外国籍の店

員さんをよく見ます。私の自宅のそばのコンビニエンスストアでは、日本人より外国人の店員さんの方が多いくらいです。私の中での外国人労働者に関係するこれまでのトピック

クとしては、技能実習生で来られている方々が劣悪な環境ではたらくているという報道を目にしたこともあり、受け入れ先にはひどい事業者がいるものだというネガティブな印象がありました。もちろんきちんとされている事業所の方が多いと思いますが、せっかく日本を選んで志をもってきてくれているのにそんな状況があるということにはやるせない気持ちがありました。私も若い頃にワーキングホリデーで少しの期間海外で過ごしたことがあり、その際は私も外国人という立場でしたが、いろんな場面でもよくしてもらった印象があるので、よりそういう思いになったように感じています。

エゼル福祉会としては、職員採用についてなかなか思うような採用ができない状況が続いている中、今年度に入ってすぐ、大川理

事長から「外国人を採用するのはどう思うか」という話が現場の管理職や職員に対してあり、ディスカッションする機会がありました。具体的な話にはなっていませんでしたが、7月の研修と前後して、エゼル福祉会では、実際に外国人の雇用にむけての動きが進み始めました。

研修後、すでに日本にお住まいで職を探しているネパールの方がいらつしやるということで、ご紹介していただき、エゼル福祉会の現場に一度体験に入ってくださいました。この方は言葉についてもまったく問題なく、エゼルの現場職員としても、ぜひ来ていただければと思いますが、最終的には、ご本人の希望する分野の職場があるということでの縁がありませんでした。

そして現在は、特定技能の外国人労働者を

ご紹介していただける企業の方とつながり、その中で具体的な採用に向けて準備をしています。大川理事長と施設長が企業担当者と話し合いを重ね、8月に2名の応募者と面接を行いました。お一人はネパール出身の方です。すでに名古屋にいらつしやるということで、直接来所していただく中でお話をし、もう一人の方はベトナム出身の方で、日本の他県で就労中ということで、オンラインでお話をしています。初めて受け入れる現場の職員としても不安も多いと思いますし、実際やっていく中でお互いに課題や苦労も多々でてくるかと思いますが、やってみないとわからない部分もあるので、法人としては、まずは受け入れていくことで合意し、就労に向けてすすんでいます。手続きの進捗やお互いの状況に変わりがなければ、このまま順調にいけば年

内には就労開始となる予定です。

今回神田先生の研修がありましたので、法人全体としても海外出身の方が一緒にはたらくということに対して、より意識して具体的なイメージも持てたように思います。

私たちは、障がいのある人もない人も分け隔てられることなく、あたりまえに暮らしお互いを尊重しあいながら共生する社会の実現を目指しています。誰もがかけがえのない大切な存在です。支えあい、つながりながら共に生きるその社会には、もちろん国籍や出身の違う人も含まれていると思います。

エゼル福祉会としては初めての試みになりますが、法人理念のもと、海外出身の人とともにたらくという新たなページをみんなでめくっていききたいと思います。

神田すみれ先生 プロフィール



多文化アドバイザー / 通訳者
Multicultural Advisor / Interpreter

日本に住む移民の生活サポートや教育、政策提言を通じて、市民団体、教育機関、企業、行政と連携して多様性を推進します。30年以上の国際経験と実績をもとに、多文化共生社会の構築に向けて幅広く活動しています。

- 1975 ● 愛知県一宮市に生まれる
未熟児・口蓋裂で生まれ、幼少期に手術・言語訓練を受ける
- 1990 ● 15歳で交換留学生として渡米
サウスダコタ州の公立高校に通い、ホストファミリーと生活
- 1995 ● サウスダコタ大学 音楽学部に入學
多様な留学生と交流し、多文化共生への関心を深める
- 1999 ● 日本に帰国後、ホテルで勤務
- 2000 ● 台湾で日本語教師として働きながら、中国語を学ぶ
- 2006 ● 名古屋大学大学院 国際開発研究科 博士前期課程に入學（2009年修了）
地域の外国人支援活動を本格化
- 2008 ● 名古屋国際センターにて法律相談通訳者（英語・中国語）として活動開始
- 2011 ● 愛知労働局 名古屋外国人雇用サービスセンター 英語通訳として勤務開始
- 2014 ● 名古屋大学大学院 国際開発研究科 特任助教
- 2015 ● 三重県四日市高校 スーパーグローバルハイスクール海外交流アドバイザーに就任
- 2017 ● 愛知労働局 外国人雇用管理アドバイザーに就任
- 2020 ● 犬山市役所 外国人相談員として外国人住民の支援に従事
- 2022 ● 愛知県立大学大学院 博士後期課程に入學
移民の社会参画の理論と実践を深める研究を開始。
- 2023 ● 愛知県高浜市多文化共生推進プラン策定委員会委員長に就任
地域の共生社会構築を推進

出会い

生活支援部 職員

久野 穂



学生時代の私は、福祉系の大学に入ったものの将来の目標がありませんでした。4年生になっても自分がどういった仕事をしたいのか分からないまま、合同説明会で当時ウィルの施設長だった方から声をかけられ、誘われるままエゼル福祉会に就職しました。入った当初は「利用者さんとお菓子を作ってお給料が貰えるならいいか…」という感覚でした。それでも時間の経過とともに仕事にも慣れてきて、周囲のことに目が向くようになりま

した。

ウィルの活動時間が終わり15時半になると皆さんそれぞれ帰路につきます。毎日ヘルパーが迎えに来て一人暮らしをしている人、親御さんと生活しているものの定期的にヘルパーとの外出をしている人、当時のウィルの利用者さんはヘルパー制度を利用している方が大半でした。しかし私が担当していたAさんは全くヘルパーの利用がありませんでした。毎日ヘルパーがたくさん来るのに誰もAさんを迎えに来ないのが不思議で、どうしてヘルパーが来ないのか、そのまま本人に聞いたことがありました。今にして思えば若さゆえの過ちと言うのか、本人に聞く前に先輩職員や親御さんに聞くべきだったのかもしれません。

Aさんは私に尋ねられて少し驚いたような、どう返事をしているのか困ったような様子でした。しかしその後も話をしていくと、小さい反応ながらも「僕も外出をしたい」と教えてくれました。私が「そうだよね。Aさんもヘルパーさんとお出かけしたいよね。15時半に帰ってもつまらないよね」と言うと、今までに聞いたことがない、上ずった大きな声で「うん」と言われました。Aさんの胸が張り裂けるような、切羽つまっているような、心底そう思っているのだなと感じたことを私は今でも覚えています。

それまでの私は、お菓子の売り上げがよかったとか、利用者さんが楽しそうにされているかなど、施設の中での出来事に関心がありませんでした。しかし利用者さんの身

になつて考えれば施設にいるのは平日の6時間のみであり、そうではない時間の方が長いのです。ヘルパーを全く利用していないということは、その時間は全て家族と生活しているということになります。本人や家族が望んでそういった生活をしているのであればいいのかもしれませんが、果たして若い男性が休日母親と過ごしについて楽しいのだろうかという思いが心をよぎりました。

Aさんは私の妹と同年です。妹は好きな時に好きな人と遊びに行くことができます。何故Aさんはそうではないのでしょうか。それは自分一人では出かけることができないという障害を負っている為です。手足を自由に動かせないことは、どうにもならない、仕方のないことなのかもしれません。しかしそ

のことで障害がある人と無い人に格差が生まれることはおかしいのではないか。障害があることで社会との交わりが絶たれるのはおかしいことです。

そのことに疑問を感じつつ、当時の私は外出をしたいという希望を一緒に叶えてあげることができませんでした。通所施設の職員であつたので自分自身がヘルパーとして入るわけにもいかず、単発でのヘルパー利用はあつたものの、継続的な利用にはつなげることができませんでした。

私が通所部門からヘルパー部門へ異動となつてからも、他の仕事を覚えていかなくはならず、ヘルパーとして外出の利用に入ることができない状況が続いてしまいました。そのことに焦り拙速に進めようとした結果、

対話が上手にできなくて親御さんとの関係を悪くしてしまいました。

その結果ヘルパー利用への道は遠のき、いたずらに時間だけが過ぎてしまいました。自分一人の力ではどうすることも出来ず先輩職員の手を借りることで、今はショートステイや外出の利用ができるようになっています。あの時私が思い描いた形ではありませんが、Aさんの希望を少しは叶えられたのではないのでしょうか。

過去にはこの仕事を辞めようと思ったこともありました。Aさんのことが気にかかり辞めることができませんでした。就職してすぐにそう思える存在に出会えたことは、幸せだったのかもしれません。

《活動状況》

7月

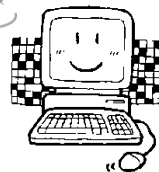
- 5日 音楽サロン開催
(津軽三味線 加藤訓菊)
- 7.8日 喀痰吸引3号研修 (北出)
- 8.11日 さんび建設会議
- 8.16日 動作法研修
愛知淑徳大学 二宮先生
- 14日 西特別支援学校・港特別支援学校訪問
(大川・溝口)
- 15日 連絡調整会議
- 16日 さんび建設会議
- 19日 エゼル福祉会全職員研修
「ハラスメント研修」
エゼル福祉会評議員 伊藤勤也氏
「外国人労働者の人権を守る」
愛知県立大学講師 神田すみれ氏
- 24日 通所親の会
- 25日 全国障害児者の
暮らしの場を考える会 総会 (榊原)
- 25日 名古屋生活支援事業者連絡会 総会
(渥美)
- 28日 会報発送
- 31日 W I L L 一日外出 (円頓寺まつり)

8月

- 3日 音楽サロン開催
(チェロ&ピアノ 紫竹友梨 & 安藤弘子)
- 6日 会報会議
- 6日 動作法研修
愛知淑徳大学 二宮先生
- 7日 社協 対人援助技術研修 (西川)
- 9日 赤城町建物 貯水槽清掃
- 11日 通所 祝日開所
- 12日 W I L L 夏祭り(盆踊り)
- 13~15日 W I L L・V O L O 夏季休暇
- 18日 さんび建設会議・連絡調整会議
- 18日 動作法研修
愛知淑徳大学 二宮先生
- 19日 社協 発達障害研修 (戸谷)
- 19-29日 淑徳大学実習生
- 22日 きょうされん北東ブロック会議(佐藤)
- 24日 生活支援部 流しそうめんレク
- 28日 社協 発達障害研修 (大森直)



事務局コーナー



「ご協力ありがとうございました」

7月～8月（敬称略・順不同）

★ ご寄付いただいた方々

(NPO 法人コンビニの会)

※1万円以上お振込みの方

(株)愛北リース

★ 物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)

中谷暢宏 鈴木丈登 渡辺世津子

伊那晶子 水谷由香

(WILL)

佐藤慶太

(VOLO)

安永麻里 浅井宏紀 木下楓奈子

高嶋一臣 石原優樹 久保昂太郎

曾我美保 戸谷夏未 坪内美紀

★ 会報発送ボランティア

半田素子 佐藤美紀子

丹羽正子 吉田嘉子 野村加余子

★ 活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)

石原正寅 辻本道子 東原光江

石原まち 鈴木千春 寺西 剛

田村淳仁 山本 武 桐澤 潮

重松歩月 我妻勇男 小林愛恵

白木佑叡 杉浦小椰 佐藤晴紀

早川あい 尾崎京香 杉井志織

小西涼真 岩鼻海斗 伊藤葉月

牛田楓乃 大塚幸子 坂木夢菜

大倉晴菜 井伊裕美 原田浩平

藤本茉優 内山俊吾 鈴木心透

笠井翔太 松田樹里 榊原陽樹

酒井まみ子 玉那覇詠洸 長谷川美緒

榊原つぐみ 青島優津樹 平井千鶴子



コンビニハウス クリスマス会のお知らせ

毎年恒例のクリスマス会を下記の通り開催いたします。
皆様からのお申し込みをお待ちしています。

日 時 2025年12月25日(木) 13:20 開演予定
会 場 北区役所 講堂(名古屋市北区清水四丁目17番1号)
地下鉄黒川駅より徒歩5分

定 員 80名 (定員になり次第、締め切ります)
参加費 1,000円(チケット代)

プログラム: バンド演奏・お楽しみ抽選会 他
参加申し込みは下記までお願いします。

連絡先: 電話/FAX 052-505-6082

※感染状況で急遽中止することもあります。



～ 東海豪雨から25年“災害弱者”の命を守るために ～

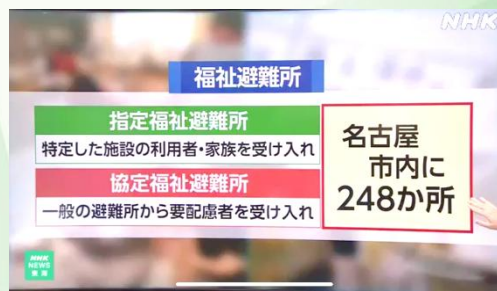
2000年9月に発生した東海豪雨。およそ7万棟が浸水した都市型水害から25年経ちました。

新川の堤防が決壊し、多くの利用者さんが住んでいた地域が浸水しました。

避難所は指定されていたものの当時は障害者への配慮がなく自宅に取り残されていました。

職員、ボランティアが安否確認、救助、片付けの手伝いに奔走しました。

エゼル福祉会は現在「指定福祉避難所」となっています。備蓄品の確認や実践的な防災訓練を定期的に行っています。その様子をNHK名古屋放送局が取材し、2025年9月12日のニュースで放送されました。こちらから放送内容が確認できます →



【 銀行口座 】

三菱UFJ銀行 小田井支店 店番 238 (普) 口座番号 1440108

特定非営利活動法人 コンビニの会

【 郵便振替口座 】 番号 00800-2-35190 コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。

障害のある人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人

〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地

コンビニハウス Tel (052) 502-7731

Fax (052) 505-6082

U R L <https://ezeru.or.jp/>

E-mail convini@ezeru.or.jp



コンビニの会

理 事 宮川 優子